生涯学習に関する団体ヒアリング結果

１　ヒアリングの対象

分類	名称
障害	ＮＰＯ法人 調布心身障害児・者親の会
多文化共生	調布市国際交流協会
サークル	調布わいわいサロン
大学	国立大学法人 電気通信大学

２　ヒアリングの結果

①　分類：障害　（ＮＰＯ法人 調布心身障害児・者親の会）

【現状・課題】

- 親の会として，定期的に学習会や懇談会を行っており，同じ悩みを持った方の仲間づくりの場でもあり，情報交換を目的に参加する方が多い。
- １８歳以上の生涯学習の不足として，学齢期は特別支援学級・学校や放課後等デイサービスなどで学ぶことができるが，学校卒業後，就労や作業所での通所になると生涯学習の場が減少する。
- 生涯学習の場がないと，家にこもりがちとなり，精神的にも身体的（肥満など）にも影響が出てくる。
- 手芸や工作が好きな方が多い。コロナ禍で家での活動も増えたことから，オンラインゲームなども人気である。
- スポーツは，当事者だけではできないことも多く，対応可能な指導者が十分にいなかったり，家族の付き添いが必要といった課題もある。（家族としては，フルタイム勤務や高齢化など付き添いが難しい場合も多い。ヘルパーとの外出も選択肢としてあるが，やはり同世代で同じ趣味の仲間がいると活動の充実につながる）
- 情報収集は SNS（LINE,Twitter,Facebook など）が多い。

【今後の生涯学習振興に向けて】

- 当事者から話を聞きながら，ニーズを捉えたうえで，生涯学習につながる取組を進めていってほしい。障害のある方が体を動かして楽しめる「ほりでーぷらん」も人気な取組であるが，年に数回の取組となっている。継続的に余暇活動を楽しめる取組が地

域であると良い。

- 自主的に活動の場に行ける方もいるが，送迎が必要になる方も多くいる。継続的な活動となれば，送迎付きでの取組も必要である。一つの場所での取組だけでなく，地域福祉センターや公民館など，各地域で実施されるとより参加しやすくなる。
- 指導者については，障害者対応に慣れた経験者や補助者がいることで，初回でも親子で楽しめ，取り組むことができる。
- 周囲の障害者理解の促進に向けた「交流の場」も必要であり，子どもの頃から理解してもらえるよう，子どもたちが障害のある人と直接触れ合い，障害について学習することも必要である。（ブラインドサッカー体験，障害者への対応を学ぶ機会など）
- 市が行っている出前講座を活用してもらえるような情報発信を行うことや，ＳＮＳを活用した取組の情報発信も効果的である。

あおぞらサッカースクールの様子

パラアート展作品制作時の様子

②　分類：多文化共生　（調布市国際交流協会）

【現状・課題】

- 自治会のイベントやお祭など，地域の活動に関して，市民・地域の一員として貢献したいという外国人もいるが，役割を与えられず，地域貢献がしたくてもできないと感じる方もいる。
- PTA などの役割分担をあえて外されるなど，疎外感を感じることがある。日本人は，無意識・善意で対応していることも多い。一方で，積極的にコミュニケーションを取る日本人がいた場合に，スムーズに馴染むことができたケースもある。
- 外国人で言語が困難なうえ，障害を抱えている方もいる。地域活動などに参加するハードルがより高くなる。その他，調べたいことはインターネット検索や同国コミュニティで解決する外国人が多い。
- 学生は大学のサークルに所属できるが，特に社会人になると学習のための情報を得る機会や地域との繋がる場所が少なくなる。

・外国人が“お客様”としてではなく主体的に活動するための情報量が不足している。
＜例＞
→地域の活動に参加したくても，周知方法が紙媒体のみでネット検索しても出てこない。
→ホームページにたどり着いても，「やさしい日本語」で表記されておらず内容がわからない。また，サークルガイドブックの場合，日本語での案内が中心となり，イラストやQRコードがなく，冊子を見ただけでは必要な情報を得ることができない。
・様々なサークルがあるが，決まったメンバー内で閉鎖的になっている団体もあり，外国人が参加すると“お客様”扱いで，役割を与えられることがない。必要性を感じる環境になっていない。
・防災に関しては，平時から地域と繋がりがあることで助け合うことができるが，地域活動に参加している外国人は少なく，防災訓練にも参加していないことが多い。
・北部公民館は熱心に事業展開しているが，基本的に市内では，外国人の生涯学習に関する相談場所が少ない。

【今後の生涯学習振興に向けて】
・災害時は，日頃の地域活動が役に立つため，小さいことでも，地域やサークルでの役割を与え，外国人も地域の一員であり同じ市民であることを理解することが重要である。
・外国人や障害のある方への配慮について，市民にご協力いただけるような取組が必要である。
＜例＞
→市内のサークル登録時の書類に，外国人・障害のある方への配慮に関する市の取組（やさしい日本語使用，ルビ振りなど）を記載し，外国人・障害のある方への対応について意識づけをするなど

調布市国際交流協会（たづくり９F）

日本語教室の様子

③　分類：サークル　（調布わいわいサロン）

【現状・課題】

- 会員数９５名（男性５２名，女性４３名）のメンバーで活動している。会員数を増やすことも可能であるが，貸出施設の定員上限もあり，会員を増やしすぎることの課題もある。
- 新型コロナウイルスの影響として，令和２年度及び令和３年度の事業は減少したものの，令和４年度は，新型コロナウイルス感染症拡大前の事業数に戻ってきている。
- シニア層，とりわけ退職後の方は，地元とのつながりが薄い方が多く，また，活動に参加できる有効な情報を得る手段を知らない。
- 当サークルの新規加入者と退会者のバランスとして，６０代の加入が少なく，それよりも上の世代の加入もあり，サークルの中でも高齢化が進んでいる。過去，調布市全体の団体登録情報から独自で調べた内容では，男女では，女性の割合が多く，若い世代というよりは，平均すると７０代の活動が多い状況となっている。

【今後の生涯学習振興に向けて】

- 様々な活動に「自ら何かに取り組みたい人」，「何に取り組んで良いかわからない人」，「何もしたくない人」の３つの分類に分かれると感じており，市報は有効な広報媒体であるが，その他，活動につながるきっかけとなる周知は非常に重要である。
- 退職後は，当然，これまでのスケジュールがなくなり，手帳が空白となる。スケジュールが埋まるような，活動参加が必要であり，それにはきっかけが大事である。定期でも不定期でも，予定あるということは生きがいにもつながる。
- きっかけづくりの手段としては，様々な提供方法の方がよい。紙（チラシ）で周知するか，ネットを活用するかなど，世代のニーズに応じた対応が必要である。
- 生涯学習の重要性を伝えていくために，「生涯学習」という表現を，わかりやすく伝えていく必要がある。

調布わいわいサロンでの活動の様子

④　分類：大学　（国立大学法人 電気通信大学）

【現状・課題】

- 市内中学校や調布市子ども・若者総合支援事業「ここあ」などで，学生が学習支援を行っている。ボランティアに興味のある学生に対して周知をしている。地域への参加としては，行政と教授との関係性で，学生につながることもある。
- 在学する学生への教育，研究に関する対応だけでなく，地域に開かれた大学として，ボランティアを必要とされる団体への支援，市民向け公開講座や講演会などにも取り組んでいる。また，小学生向けの工作，プログラミング教室も行っている。
- 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により，様々な活動が制限されたこともあり，活動がうまく引き継がれないことも多くあった。活発な部活については，学生だけでも運営が戻ると思うが，小さいサークルやボランティア活動などは，学生だけでなく職員（大人）が手助けする必要があるとも感じている。

【今後の生涯学習振興に向けて】

- サイエンスの楽しさについて広く知ってもらい，研究者と市民が気軽に話し合い，交流できる「サイエンスカフェ Chofu」も学内に定着している。公開講座等を実施することで，大学の敷居が高いイメージを少しでも和らげるためのアピールをしていきたい。
- 市や関連機関と連携して取り組んでいる健康増進プログラムでは，研究機関として，地域との関われる機会となっている。大学機関としては，市報や出前講座での周知も重要であるが，敷居をより低くするために，地域とつながりや大学の取組が口コミで広がっていくことが大事である。

「サイエンスカフェ Chofu」チラシから